The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit. : ショーペンハウアーとその父
Author(s)	須藤, 訓任
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 25-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6012
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit.
── ショーペンハウアーとその父 ──

須藤訓任

筆者は数年来「哲学と家族」というテーマのもと、とくにショーペンハウアー哲学を論究の俎上に載せてきた。

「哲学と家族」というテーマ設定はこれまで、ほとんどなされたことがないように思われる。たしかに、両親や兄弟姉妹などとの関係が哲学者の人間育成や思想形成に及ぼした影響については、伝記などに詳述されることはあるにせよ、思想問題としての意義に関しては傍系に留め置かれてきたというのが実情であろう。「家族」に関する社会学や心理学、教育学はあっても、「家族哲学」という語がおよそ耳にされないことにも、そのことは明らかである。「家族哲学」は将来的課題として横目ににらみつつも、さしあたり、家族のメンバーもまた、哲学者本人に劣らず、文化史的に重要な足跡を残している事例を取り上げ、そのことによって、思想問題としての「家族」のダイナミズムをより具体的に浮き彫りにすることに取り組みたい。

こうした問題意識からするなら、ショーペンハウアー一家は対象として取り上げるのにうってつけである。というのも、早く死んだアルトゥールの父は別とするなら、母ヨハナはワイマールでサロンを主催して、ゲーテなどと親交を保つと共に、小説や旅行記を矢継ぎ早に発表し、当代隋一ともいうべき女性流行作家としての地位を築いたし、また病弱の妹アデーレは残した作品の数こそ少ないものの、多方面に傑出した才能を発揮した人物であったからである。

だが、本稿で主題とするのは、アルトゥール・ショーペンハウアーと、彼が 16 歳のとき死別した父、ハインリヒ・フローリスとの関係である。ただし、父とのその関係はもっぱら、息子の側の思想の問題として考察される。つまり、父との関係が息子の思想にどのような「影響」を及ぼしたのか、その内実を探るというのが、本稿の目論見である。その際、重点は、父から受けた教育などの具体的事項が、個々の論点に関する息子の思想内容をいかに規定しているのかというところにではなく、むしろ、息子の思想活動を全体として可能ならしめる「空間」がその精神に映じた「父」の姿によって、どのようにして開拓され、彼の思想のいわば「超越論的」枠組みを構成することになったのか、を解明することにおかれる。

結論を少々先取りしておくなら、ショーペンハウアー思想において、「父」は亡きものであることによって、「真理」と同一視される。しかも、その「真理」たるや、この世の諸真理の真理としての身分を保証するような超越論的真理であって、いかなる妨害や誘惑の魔手も寄せ付けないだけの純粋性と強靭性を具えた理念として理想化される。「神」ないし「神」の代理として神格化された真理である。真理のこの理念化ないし神格化を可能ならしめた存在、いや非存在こそ、ショーペンハウアーにあっては「父」であった。

１．父の死

1819 年 12 月当時 31 歳のアルトゥール･ショーペンハウアーは、ほぼ 1 年前に出版した主著『意志と表象としての世界』への矜持を胸に秘めながら、ベルリン大学哲学部の私講師の地位を得るべく、同学部の学部長に対し、それまでのみずからの経歴を述べた比較的長文の文章をラテン語でしたため、提出した。その履歴書の最初のほうで彼は次のように述べている。

> わたしはダンツィヒで 1788 年 2 月 22 日に生まれました。父はハインリヒ・フローリス・ショーペンハウアーで、現在も存命中の母、ヨハナ・ヘンリエッテ・トロジーナーは公刊された多数の著作によってもよく知られています。とはいえ、わたしはあやうくイギリス人になるところでした。というのも、母は出産間近かになってようやくダンツィヒに戻ったからです。――他方、父は立派な人でした。裕福な商人でポーランド国王の宮廷顧問官でもありました。もっともそのように呼ばれることは決して認めませんでしたが。峻厳でしたが、同様に公平で誠実、信義に厚い人で、そのうえ商売上の事柄について卓越した慧眼を備えていました。この父にわたしがどれだけのおかげを蒙っているか、言葉でもって表現することはほとんどできません。というのも、父が最良のものと思って定めたわたしの進むべき道筋は、わたしの精神に適したものではなかったとはいえ、次のようなことはすべてひとえに父のおかげなのです。つまり、わたしが早くからいろいろな学芸に習熟し、ついでまた、わたしが唯一そのために生まれたところの学問研究を追及し、精神を学識によって高めるべく自由と余暇とそれ以外の補助手段に恵まれたこと、そしてそのあと最後には、より成熟した年頃となったいま、わたしのような境遇や才能の持ち主がごくまれにしか享受したためしのない便宜がわたしには労力を払うまでもなく与えられてあるということ、すなわち、自由極まりない余暇とあらゆる心配事の完全な欠如、これによってわたしには、続く多くの年月を利得とはまったく無関係な研究や探求、また難解な省察にもっぱら振り向け、最終的には、探求し考察したことを何ものにも気を取られずまた煩わされずに書き記すことが許されたのです。
>
> 「なんとなれば、いかなる帝もこれだけの余暇をわれらに授けることはかなわなかったのだから。*Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit.*」――
>
> こうしてわたしは、この立派な父がわたしに対してしてくれた、口ではまったく言い表しえないほどの善行と恩恵とを、生きている限り、心からの感謝の念を持っていつも思い起こすことでしょうし、また父の思い出を聖なるものとして心のうちに培ってゆくことでしょ

う[1]。

父ハインリヒ・フローリスに対する敬愛の念が吹き零れそうな文面である。とはいえ、「父の思い出」を云々する最後の一文からも推察されるように、父はすでにこの世にない。この履歴書が執筆されている時点で、死去から 15 年近くも年月は過ぎている。1805 年 4 月 20 日、裕福な貿易商であったハインリヒ・フローリスは、家の倉庫に開いていた隙間から運河に落下して死亡した。自殺と推定されている。そのしばらく前から病的な不安と難聴の亢進に悩まされ、神経質で激昂しやすくなっていた。記憶障害も出てきていた。自分の性格と正反対の、およそ 20 歳年下ではつらつと元気、知的興味の旺盛で教養豊かな社交好きの妻ヨハナに対する嫉妬もあったかもしれない。むろん商売上の心配もあったろう。いずれにせよ、さまざまな事情が重なった上での、死であった。享年 58。

ハインリヒ・フローリスはアンドレアス・ショーペンハウアーとその妻アンナ・レナータ（精神的に病的なところがあったといわれる）の長男として、1747 年ハンザ同盟の自由都市ダンツィヒに生れた。アルトゥールの履歴書にもあったように、「峻厳でしたが、同様に公平で誠実、信義に厚い人で、そのうえ商売上の事柄について卓越した慧眼を備えてい」た。故郷のダンツィヒを愛する、誇り高く気骨のある共和主義者であり、ヴォルテールの愛読者であった。第 1 回ポーランド分割（1772 年）後、ダンツィヒはプロイセン軍に包囲されたが、プロイセンの司令官はアンドレアスに世話になった礼に、馬好きなハインリヒのために馬の飼料の搬入を申し出たところ、ハインリヒは「今のところ自分の厩には備えがあるし、備蓄が尽きたら馬どもを始末するまでだ」と答えたという、エピソードが残されている。「自由なくして幸福なし Point de bonheur sans liberté」というフランス語を紋章としていた家の長にふさわしい毅然たる態度である。

諸国を旅行することを愛し、フランス、イギリスには数年間滞在したこともある。特にイギリスの生活習慣を重要視し、一時はかの地に移住を考えさえした。ダンツィヒを離れるまではオリーヴァという田舎の地に別荘を構え、イギリス風庭園の造成にも熱中した。毎日、イギリスとフランスの新聞を読み、息子には「タイムズ」を、これを読めばすべてがわかるといって、勧めた。（息子は生涯その勧めに従った。）息子に対しては、どこかしらデカルト（『方法叙説』）を意識していたであろう「わが息子は世間という書物を読むべし」を教育方針としていた。1793 年第 2 回ポーランド分割で、ダンツィヒがプロイセンに併合されることになったのを嫌い、一家はハンブルクに移住するが、その際税金だけで財産の十分の一を失うという痛手を厭わなかった（それでも商売はそののちある程度立て直された）。ハンブルクでは市民権を取らず、居留民 Beisasse で通した。（そのためもあって、アルトゥールも生涯無国籍人のままであった。）

政治権力におもねることも、まして脅迫されることも潔しとしなかった、この自由市民は、しかし、性格的には、突然激昂したり、ふさぎこむという気難しさを具えていた。いわゆる癇癪も

---

[1] Arthur Schopenhauer: *Gesammelte Briefe*, herausgegeben von Arhur Hübscher, 2., verbesserte und ergänzte Auflage, Bonn, 1987,S.47-48.

ちのはなはだしい人とでも言えば、それほど実態から離れていないだろう。この気難しく神経質な性格を、息子アルトゥールは受け継いだ。そして、そのことは息子自身、重々自覚していた。次に挙げるのは、1833 年ごろ、つまりアルトゥール 45 歳ごろに書かれた断片である。

> 挙句のはてに、自然はわたしの心に、猜疑心・過敏症・激情・矜持を、哲学者の平常心 mens aequa とほとんど折り合いがつかないほど贈与して、わたしを孤立させた。父からわたしは、自分でも呪わしい、･･･ 自分の意志の力のすべてを繰り出して抑え込まねばならなかった不安感を受け継いだのだ。この不安は時折りほんのちょっとしたことをきっかけとして、すさまじい勢いでわたしを襲い、そのためわたしは自分の行く手に、可能ではあるが、ありそうもない不幸ばかりをありありと見ることになるのだ。恐ろしいことを空想するとこの性向は時によって信じがたいものにまで嵩じる。すでに 6 歳の頃、ある夕べ散歩から帰ってきた両親は、わたしが突如両親から永久に見捨てられたと妄想して、完全に絶望しているさまを見出した。特別興奮するようなことが生じなくとも、わたしのうちには絶えず心配する心があって、危険を何もないところにも見また探し出してしまうのである。この心配性のために、ごく些細ないや事も無限な大きさに拡大され、人付き合いがすっかり難しくなるのである[2]。

心配癖の事例としては、病気や諍い、兵役、毒入りタバコの摂取などが挙げられているが、これらはみな事実でもないのにやたらと不安を掻き立てたのであり、また「夜中物音がしようものなら、ベッドから跳ね起き、剣とピストルをつかんだ。ピストルには常時弾をつめてあった」(Ibid.) という。いかにも大げさで滑稽な感さえするが、これだけの過敏な心配性が父の遺伝だとして息子は自覚していたというのである。ここの記述と、上述の履歴書を対照してみよう。いずれの叙述内容も、ショーペンハウアーの筆の誠実性を疑う理由はない。履歴書でひたすら強調されていたのは、父が息子たる自分に「余暇」を与えてくれたおかげで、自分は後顧の憂いなしに哲学研究に邁進できる境遇となったということであった。ありていに言えば、父が残してくれた遺産が自分をこれまでも、これからも、生計上の経済的心配から自分を解き放ってくれた。だから、自分は独立不羈の精神をもって哲学探求に身も心も捧げることができる。自分の書くこと・教えることには金銭的な下心など忍び込む恐れはないのであって、すべてはことごとく、ひたすらに純粋な真理愛の発露にほかならない。それもこれも、亡き父の恩なのであって、どうして父に心からの敬慕の念を捧げないでいられよう。

だが、その同じ父は、1833 年の断片によれば、「猜疑心・過敏症・激情・矜持を、哲学者の平常心とほとんど折り合いがつかないほど」息子の性格に引き継いだのであった。この疑り深い心配性に息子は生涯悩まされ引き回されることになるだろう。この性格は哲学者としての活動を妨

---

[2] Arthur Schopenhauer : *Der handschriftliche Nachlaß*, Band 4-Ⅱ, S.120-121. 以下、同遺稿集からの引用は HN の後に、巻数と頁数とを挙げる。

げるものにほかならない。とするなら、いくら父のおかげで経済的に自立して哲学活動を営む「余暇」が与えられたとしても、その半面で、その活動の障碍となる「不安」な性格を植え付けられたとなれば、父の恩も半減するといわねばならないのではないか。

ところが、どうやら息子はそのようには考えない。「この立派な父がわたしに対してしてくれた、口ではまったく言い表しえないほどの善行と恩恵とを、生きている限り、心からの感謝の念を持っていつも思い起こすことでしょうし、また父の思い出を聖なるものとして心のうちに培ってゆくことでしょう」と 1819 年末の履歴書が述べていたことは、それ以降も従順に守られたといってよい。その何よりもの証拠は、「不安」の遺伝について記していたあの断片と同じ 1833 年に執筆された次の遺稿に明らかである。その年アルトゥールは、初版ではほぼ黙殺の運命に晒された『意志と表象としての世界』の第二版の出版を計画し、そのための序文の草稿も執筆する。それは、同書を「父」に捧げる内容となっている。

献辞（端的に手短に）

父ノ公明ナル御霊ニ Piis patris manibus

私が真理のために生きながら、その殉教者となることがなかったのは、あなたのおかげと感謝します。私が生まれながらの、学び考え探求しようという衝動に付き従いながら、貧窮も物乞いも諂いもしないで済み、あるいは、哲学を他なる思惑の道具に貶めその思惑に従って私の説を形作ったり、それどころか、光を恐れる者たちである坊主や偽善者に私を卑劣なたくらみの道具として売り渡そうという誘惑に陥らずに済んだのも、ただあなたのおかげですし、這イツクバル凡人 médiocre et rampant と割の合わない競争をする必要もなく、生涯頭をまっすぐ上げて「ワレワレニハ二日ノ命シカナイ、軽蔑スベキ輩ノモトヲ這イツクバッテソノ二日ヲムザムザ過ゴスノハ詮方ナイコトダ nous n’avons que 2 jours à vivre : il nous vaut pas la peine de les passer à ramper sous des coquins méprisables」というヴォルテールの高貴な忠告を遵守できたのもあなたのおかげです。――自分自身を自由に所有するためなら他のいかなる所有も喜んで断念する私の自足性のゆえに、その自己所有が実際に生涯にわたって私に与えられ、それゆえ、毎朝日が登るとともに、この一日は私のものだと言いえたのは、あなたのおかげなのです。また私の尽力に同時代者がまったく関心を示さなかったとしても、仕事を完成させる差障りにはならず、それに全生涯を捧げることができたのも、あなたのおかげです。以上のことすべて、これだけ多くの偉大なことすべてを私は、忘れがたい父であるあなた、ひたすらあなただけに負うているのであって、この世のほかの誰にでもありません。そのことに対し、私はいま、あなたがかつて見越していたとおりに、毎日感謝を奉げています。

ナントナレバ、イカナル帝モコレダケノ余暇ヲワレラニ授ケルコトハカナワナカッタノダカラ。だから、どうか庇護者としての名誉ある地位をお受けになってください。私の哲学に喜びと教えを見出す者なら誰でも知っておくべきことなのですが、この哲学は、私なしではありえなかったと同様に、あなたなしにもありえなかったのです。そして、私の名前が及ぶ限りあなたの名前もまた及ぶべきなのです。というのも、あなたの偉大な善行に対して応え

ることができるのはこのことだけなのですから。（HN,4-I,S.161-162. なお同様の文面はすでに 1828 年とその翌年にも記されている。Vgl.HN,3,S.379-380, S538.）

この序文は結局、その時期には第二版の出版がままならなかったこともあって、上の文面のままで日の目を見ることはなかった。（第二版がさらに大幅に改訂増補されて上梓されるのは、これからおよそ十年後の 1844 年のことである。そのときには、後に見るように、序文も新たに書き直されることになる。）しかし、父が愛読した著作家であるヴォルテールからの引用といい、さらには、父が 15 歳の息子に与えた忠告である「頭をまっすぐに上げ」た正しい姿勢のさりげない強調（1804 年 10 月 23 日付、および 11 月 20 付けの、つまり、死の半年前の最後の、父の息子宛書簡参照）といい、たとえ「序文」として公刊されたとしても一般読者には到底その含みは伝わりようがなかったにしても、そしてその意味であまりにプライベートな形による遅ればせながらの父への愛情と謝意の告白であるにせよ、この草稿が息子の真情に発するものであることは間違いないだろう。だが、父に対する敬慕と感謝の念がいかに大きかろうと、履歴書も漏らしているように、「父が最良のものと思って定めたわたしの進むべき道筋は、わたしの精神に適したものではなかった」のも確かなことであった。アルトゥール晩年の高弟、フラウエンシュテトは次のようなアルトゥールとの会話を記録している。

> わたし［フラウエンシュテト］がある時彼［アルトゥール］に、彼は若いときにたいへん苦しんだということがあって、そこから彼のペシミズムは説明付けられるのではないか、と尋ねると、こう彼は答えた。「そんなことは全然ない。そうではなくて、自分は若者の頃いつも大変憂鬱で、18 歳ごろだったか、まだたいそう若いときに、『この世界は神が創ったんだって？　そうじゃない、むしろ悪魔が創ったんだ』と一人思ったもんだ。――むろん、父親が厳しかったもんだから、教育ではたしかに随分苦しまねばならなかったがね[3]。

ここに言われる父の教育の厳しさとは、父の個々の指導の苛酷さというよりも、息子を自分の後継者として貿易商に育成しようというその教育方針が、学問の研究の道を歩みたいという息子の願望と真っ向から衝突したがゆえの厳しさと考えるべきものであろう[4]。たしかに、この厳しさが自分のペシミズムの直接的誘因であることはショーペンハウアーは否定している。しかし、ついでの付け足しのようにして、父の教育ゆえの「苦しみ」をわざわざ挙げているということにも意味が秘められているだろう。晩年のショーペンハウアーにとってすら、少年の頃の教育の「苦

---

[3] Arthur Schopenhauer: *Gespräche*, neue, stark erweiterte Ausgabe, herausgegeben von Arthur Hübscher, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1971, S.131. 以下 G と略記。

[4] ここには、後に述べるヨーロッパ周回の旅の途上、英語力の上達のためにイギリスのウィンブルドンで数ヶ月間寄宿学校に預けられた際の、生涯のトラウマともなる教育体験も念頭にあるかもしれない。両親はその間スコットランドなどを旅して回っていた。息子からすれば随分恨めしい話で、親に裏切られたという思いが募ったことだろう。イギリスでの教育体験については、Bridgwater, P.: *Arthur Schopenhauer's English Schooling*, London and New York, 1988 参照。

しみ」が「苦しみ」の経験として、まず第一に思い浮かべられるものだった。まるで教育のこの「苦しみ」こそ、ペシミズム的世界観の成立にダメを押したかのようである。だが、父ゆえのこの苦しみにもかかわらず、また、上述の「不安」な性格の遺伝にもかかわらず、息子の父への敬慕の念はとめどなく深い。どうしてであろうか。そこには何か事情がなければならない。

ところで、フラウエンシュテトがショーペンハウアーと親しく交わるようになるのは、1840年代のことであるから、上の会話はそれ以降のことと考えるべきだろうが、それ以前にすでにショーペンハウアーは、神ではなく悪魔がこの世を創造したという、会話中の報告と同趣旨のことを、遺稿ノートに書き付けている。

> 17番目の歳のとき、学校で学識ある教育を受けたわけでもないのに、わたしは、病・老・痛・死を目の当たりにした青年期の仏陀のように、生の悲惨に心打たれてしまった。この世が声高に判明に語っている真理はやがて、わたしのうちにも刻み込まれていたユダヤ的ドグマに打ち勝ち、わたしは、この世は至善の存在の作品なんかではありえない、むしろ悪魔の作品であって、悪魔は被造物の苦痛を目の保養にしようとして、被造物を存在に呼び出したのだ、と結論付けた。所与の出来事はそのことを示唆していたし、そのとおりなのだという信念が優位を占めるようになった。(HN,4-I,S.96)

この遺稿は1832年執筆と推測されている。年代的な前後関係や、フラウエンシュテトによる報告はあくまで伝聞による報告であることなどからして、フラウエンシュテトにあった「18歳ごろ」よりも「17番目の歳のとき」の方が信頼性が高いと考えるべきであろう。「17番目の歳」とは言うまでもなく、アルトゥール16歳のときのことである。16歳とは年号では1804年である。この前の年からこの年の夏すぎまで、アルトゥールは両親と連れ立ってヨーロッパ周回の旅に出ていた。ということは、彼のペシミズム的世界観の成立は、生来の「憂鬱」の気質を素地としながらも、この旅での見聞・経験によって――父の教育による「苦しみ」とも相俟って――定礎された、ないし少なくとも、この旅によって決定的な確認を強要された、と言わねばならないだろう。

「憂鬱」の気質とは、父から受け継いだ「不安」な性格とは別のものではない、少なくとも両者は同じ線上にあるものだろう。そして、その発作のときどきには、哲学者としての活動を阻害しかねない、「不安」の突発であるにせよ、これの基層となっている「憂鬱」の気質こそ、ショーペンハウアーにおいてこの世の真実を見通す眼差しの視座を構成するものであろう。とするなら、ショーペンハウアー哲学のペシミズムを成立させる要素はすべて父絡みのものということになる。これらの要素なしには自分の哲学はありえなかった。さらに、哲学することの外的自由を確保したあの「余暇」も父のおかげであった。父は内的・外的に哲学者としての自分の礎となっている。つまり、「不安」な性格の遺伝だとか、教育の「苦しみ」という、表面的に見れば敬愛の情を失わさせそうな要因もじつは、哲学者の「誕生」という観点からするなら、逆に敬慕の念を深めるものにほかならなかったのだ――このように考えれば、父への過剰ともいえる感謝の気持ちは一応説明付けられそうである。だが、ことはそれほど簡単ではない。

ヨーロッパ周回の旅とは、ドイツを出発して、オランダ、イギリス、フランス、スイス、オーストリアなどを経由して再びドイツへ帰還するものであった。1803 年春から翌年の秋口にかけて、一年半に及ぶ大旅行を、アルトゥールは父母とともに敢行したのである。しかし、この旅行にアルトゥールは無条件で参加を許されたわけではなかった。むろん、旅そのものは両親、なかんずく父親の発案である。当時かろうじて 5 歳の長女アデーレがその大旅行の一員に加えられなかったのは無理もないとしても、15 歳の息子の方も、この旅行の権利を当然のこととして認められたわけではない。そこには､父と息子のつばぜり合いともいうべきドラマが秘められていた。

先述のように、父の教育方針と息子の希望は相容れなかった。息子は、学問研究の道を目指して、ギムナジウムへの進学を願っていた。父は自由な共和主義者として、息子の希望を無下に拒絶することはなかったが、一計を案じた。それが、あの旅行への息子の参加条件である。息子を旅行に連れて行くことそれ自体は､「わが息子は世間という書物を読むべし」という教育モットーにもかなっていたであろうし、第一、これ以前にもすでにこの方針に則って、娘アデーレの生まれた 1797 年、父は息子を伴いパリ経由でル・アーヴルに赴き、商売上の仲間であるド・ブレジメール宅に息子を二年間預け、フランス語を習得させる。アルトゥールは同宅の同い年の息子アンティームと親交を結び、それはアルトゥールにとって生涯で最も楽しい少年時代の想い出となった。（帰国直後にはドイツ語での会話に支障をきたすほどであった。）

しかし、父は今度のこの大旅行に関しては、それに加わることと引き換えに、ギムナジウム進学の断念を求めた。つまり、進学を諦めその代わりに旅行に参加するか、それとも、旅行を諦めギムナジウム進学を選ぶかという、二者択一を息子に迫った。15 歳の少年は旅行の誘惑（親友アンティームの住むル・アーヴル再訪も見込まれる）に勝てなかった。あえなく、ギムナジウムの方は放棄してしまう。おそらく、父は息子の選択結果をあらかじめ見越していただろう。というのも､「世間という書物」云々というあの教育モットーからして、ギムナジウム進学との交換という取引なしにも、アルトゥールを旅に連れて行って、おかしくはないからである。父は初めから息子を旅に参加させる心積もりだったのではないか。それゆえ、息子はその性格などからしていずれにせよ、旅のほうを選ぶということによほど強い確信を父はもっていたと思われる。

正規の学校教育の放棄を代償として、この旅から得られたものはたしかに大きい。それは人格形成的にも、またペシミズムの定礎の上でも、さらに強烈な好奇心を満たし、生れもった冷徹な観察力に磨きをかける上でも重要な意義をもっていた。後年アルトゥールは、哲学者にとっての、書物による知識獲得よりも、実地の直観的経験の重要性を強調するようになるが、その素地はこの旅によって植え付けられたのである。いずれにせよ、この旅行の計略をもって、父は息子の学問への道を（一時的に）断念させた。学問への道を開いてくれたのは逆に、――詳細な経緯の説明に踏み込むことはできないが――小さい頃からそりが合わず、相互に敬遠し嫌悪しあっていたともいえる母のほうであった。いや、それよりもなによりも、父の死そのものであった。父が 1805 年 4 月という、この、いわば絶妙のタイミングで死んでいなかったら、哲学者ショーペンハウアーは誕生していなかった公算が強い。とするなら、父へのいやます崇敬と愛情とはなにを意味するのか。（そして、ちょうどそれの裏返しで進行し増大していったかにも思われる母へ

の憎悪は？）こうして問題は改めて振り出しに戻る。

父の死後も、アルトゥールは尊敬する父との約束に従って、父の志を継いで商人になるための勉強をしばらくは続ける。だが、母の方は早々に父の商社を店じまいして、新天地を求めて翌1806年9月には娘のアデーレをつれ、ワイマールに移住してしまう。かの地でサロンを主催し、ゲーテをはじめとする錚々たる教養人を集めて評判となる。ひとりハンブルクに残され悶々たる日々を送るアルトゥール（父の厳しい教育による「苦しみ」！）。一年後の1807年、アルトゥールはついに耐え切れなくなり、母に泣きついて、商売の道を放棄し、ワイマールで名誉ある地位を築いていた母のとりなしを得て、ゴータのギムナジウムに入り、のちにはゲッティンゲンとベルリンの両大学で哲学研究に没頭することになった。そしてそれまでの研究成果として完成されたのが、学位請求論文『根拠律の四重の根について』（1813年）であった。

商人になることを免れえたのは、父の死がなければ考えられなかったことである。とするなら、とくにヨーロッパ周回の旅行後には、父の死への、17歳時という季節はずれのエディプス的な無意識的欲望がアルトゥールに蠢いていなかったかどうか。そしてそれの「否定」が母への憎悪となって転移され顕在化したといえないかどうか。いや、旅行後から実際の父の死までの間に、その無意識的欲望が事実として蠢いていたかどうかが一番の問題なのではない。そうではなくて、父の死という事態を迎えてしまうや、それ以降はアルトゥール本人にとって、父の死以前に自分がそうしたエディプス的欲望を抱いていたかのように解釈され感じられてしまうことになるという点が、決定的に重要なのである。

自分は自分の願いどおり今や学問の世界へ足を踏み入れた。それはしかし、父が存在する限り、なしえなかったことであり、自分の行く手は閉ざされたままのはずであった。ところが、父の死により自分の願いは成就された。だがそれは愛する父への裏切りにほかならない。学問への精進とは、父の死が可能とした背信行為である。父の死とは――したがって、自分が心の奥底において何にも増して希求していたことだったのではないか。だが、それだけは認められない！　父の死への欲望はなんとしても否定されなければならない。そのためにはどうすればよいのか。父の死を願っていなかったことの証拠をいかにして提示すればよいのか。それには、死への欲望とは正反対の態度を示すにしくはないだろう。対象の死の欲望と正反対の態度――対象への人一倍の敬愛の情以上に、それにふさわしいものはあるだろうか。

かくして、父への異常とも言える敬愛の情の素性は明かされた。父の死に関する無意識的な罪責感――それが度外れな敬意の底に潜められていた。したがって、父の厳しさや不都合な遺伝も、また詐術ともいうべき二者択一の強要なども、贖罪意識に取り付かれた息子からするなら、自分の罪への罰として、それが自分に害をもたらすものであればあるほど、より歓迎すべきものなのだ。他方、父の死への無意識的欲望の成就はこの欲望そのものとは別のところにその原因が特定されねばならない。その最も手っ取り早い標的とされたのが、息子とは常々折り合いの悪かった母ヨハナであった。父の死の原因として母がいったん認定されたからには、それ以降母との和解の可能性は息子にはもはや思いもよらないことになる。さもなければ、自分が苦労して創作した「ファミリー・ロマンス」はもろくも崩れ去ってしまうほかないだろう。アルトゥールは以来、

父の味方にして母の敵としての息子の役を生涯の終わりまで演じつづけるだろう。むろん、それは衷心からの演技である。

アルトゥールは父の死を、病み衰える夫の面倒をみずに社交に明け暮れていたとして、母親のせいにする (Vgl.G,S.151-152)。（もっとも、20 歳も年上の夫との関係が必ずしも愛情溢れるものでなかったことは、ヨハナ自身も認めている。）いわば反動形成による、エディプス的三角関係の反転が生じていた。とするなら、エディプス的罪責意識に基づく、父への敬愛は、青年期以降のアルトゥールの思想形成にとってどのような意義を有し、いかなる「影響」を与えたのであろうか。究明しなければならないのは、この問題である。そのためには、アルトゥールのゲーテとの交渉に目を転じなければならない。

２．ゲーテからの自立

学位論文を完成したアルトゥール・ショーペンハウアーは 1813 年 11 月から 1814 年 5 月まで、母の住んでいたワイマールの地に滞在した。その間にゲーテとの知己を得（ゲーテは学位論文を好意的に読んでいた)、色彩について共同研究をおこなう。ゲーテはかの大著『色彩論』を 1810 年にすでに出版していたが、むろん色彩への興味は引き続き持続していた。クネーベル宛書簡（1813 年 11 月 24 日付）でゲーテはショーペンハウアーを「注目すべき面白い若者」で「一種の鋭い独自の感覚 Eigensinn（＝頑固さ)」を具えていると評した。また、1814 年 5 月にショーペンハウアーがワイマールを去る際にも、「打ち解けたいくつもの会話のお供と想い出に」として、次の短詩を書き記し暖かい諫言を送っている。「自分の価値を享受しようとするなら、／君は世間にも価値を認めてやらねばならない。」（Vgl. HN,4-Ⅱ,S.121）

その後ドレスデンに移ったアルトゥールは、『視覚と色彩について』を 1815 年に書き上げる。同書の全体は、「緒論」に続いて「第一章　視覚」、「第二章　色彩」に分かたれているが、「緒論」ではまずゲーテの色彩論の二つの功績を挙げる。1.「ニュートンの誤った理論の古くからの妄想」を打破したこと。2. 色彩に関する「重要で完備し意義深いデータ・材料」を提示したこと。それは経験の単なるかき集めではなく、事実の体系的な記述であるが、ただしそれに留まり、本来の説明･理論にはなっておらず､そのための準備であるとする。「この点でゲーテの作品を補完し、そこに盛られたデータの基礎となる最高原理を抽象的な形で立てて、語の最も厳密な意味で色彩の理論を提示すること――それが本論考の試みるところである。」[5]

もっともその試みは、生理的現象としての色彩という観点に限定される（生理的色彩こそが、色彩論の最も重要な半分であって､それに比べると､物理的･化学的色彩とは従属的な半分である、とショーペンハウアーは考えるからである。）「このようにして例えば、われわれはとくに、全体としては完全に正しいゲーテが何らかのことで過ち、全体としてはまったく間違っているニュートンがある程度真理を述べている地点を見出すことになるだろう。ただし、ニュートンの正しさ

---

[5] Arthur Schopenhauer: *Sämtliche Werke*, textkritisch bearbeitet und herausgegeben von Wolfgang Frhr. von Löhneysen, Frankfurt a.M., 1986, Band III, S.200. 以下同全集からの引用は SW という略記の後、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で挙げる。

とは本来意味上というよりは字面上の正しさであって、それも全面的に正しいというわけではないのだが。」（Ibid.,S.201）こう記した後、ショーペンハウアーは（初版において）次のように続けている。

> ところで、見出された理論からおのずと流れ出る、そのような訂正は、それをなした理論家にとってたいした賞賛になるものでもなければ、訂正を蒙った経験収集家にとって目立った不利益となるわけでもない。というのも、経験の道を通って科学に新たな領野を開き、多量の事実を見つけ出し、それらを直接的な連関にしたがって秩序付けて描き出す者は、新たな陸地を発見しその最初の暫定的な地図をスケッチする者に似ているのだからである。それに対し、理論家は、そうした人によってその陸地に案内された一人の人に似ており、陸地内の高い山に登って、その頂上から陸地を一望の下に収めるのである。理論家が山に登っていったというのは、彼のやった仕事である。しかるに、高所から、下方をさまよう人々が次にたどるべき道をどこで見失うのかを見て取ったり、山々・河川・森林の相互の位置関係をより正確に定めるといったことはすべて、いまとなっては、容易になされることであり、たいした功績ではないのである[6]。

「緒論」初版のこの文章では――その後の事態の推移を紹介しながら、自分をもっぱら弟子に比定する二版における文面（SW,III,S.201-202）以上に――ゲーテは「父」の役割を与えられているといってよい。なぜなら、息子である自分は、父のなした準備作業を受けそれを土台として、さらに一歩進んで父を乗り越え、父のはじめた事業を完成させると述べているのだからである[7]。実際 1749 年生れのゲーテは、亡父より二歳年下であり、アルトゥールはその父が 40 歳過ぎのときの子なのだから、ゲーテはアルトゥールの父たるにふさわしい年頃の人であろう。それだけに、16 歳で父を亡くした（『視覚と色彩について』執筆当時 20 代後半の）アルトゥールからすれば、ゲーテに父の面影を投影しながら、偉人ゲーテへの憧憬を強めていたとしても、不思議はないであろう。その意味で、「緒論」初版の一節は、息子の課題である、父への依存と独立が図らずして見事に表出されてしまっている文章である。――だがはたして、その理解で十分だろうか。

アルトゥールの（『視覚と色彩について』初版時における）ゲーテの「色彩論」に対する異論は次の 3 点である。1. 色彩の両極性について、2. 菫色の発生について（この点は第二版では削除されることになる）、3. 色彩からの白の製作について。いまこれらの争点について、ゲーテとショーペンハウアーの見解を具体的に検討するには及ぶまい。ただ、「息子」アルトゥールが「父」ゲーテに対して、異論の弁明をしている個所は見逃すわけにゆかない。

---

6 『視覚と色彩について』初版からの引用は CD-ROM, *Schopenhauer im Kontext*, Berlin, 2003 によっているので、頁数の指示はない。

7 たとえば、ザフランスキーは、「緒言」初版の文章に直接的に関連付けながらではないが、その方向で理解している。Safranski,R.: *Schopenhauer und Die wilden Jahre der Philosophie*, München und Wien, 1988, S.285.

これらの反論は、わたしがゲーテの作品［『色彩論』］の価値を心底感じ入り、あらゆる時代で最高の偉人の一人を著者とするに完全にふさわしいとして同作品を尊重しているのであるから、それだけに嘘偽りのないものであって、純粋に客観的な根拠から発したものであることがわかっていただけるろう。新たに作り出された教説は、たとえそのような偉人に由来しているとしても、後続の者がなんら付け加えるところも訂正するところも残っていないほど、成立時直後にすでに完成されているとすれば、そのほうがほとんど奇跡だろう。したがって、わたしの証明した間違いや、もしかしてそれ以外にも他の間違いがゲーテの作品に含まれているとしても、これは、全体の真理に比するなら取るに足らず、過失にすぎないとして、偉大な業績によって完璧に相殺されることになるだろう。その偉大な業績とは、百年にもわたって崇められ信じ込まれてきた、自己欺瞞と意図的な詐欺とのかの奇妙な混交［ニュートンの色彩理論］を暴き出し、同時に、自然の当該部分に関する全体として正しい表現を提示したことである。（初版からの引用であるが、第二版もほぼ同一の文面である。Vgl. SW III,S.287.）

一方ではいかにもゲーテの功績を持ち上げた内容であり、ゲーテに対する自分の異論を小さく見せようとしているようにも感じられる。だが、アルトゥールはむろん、自説の正しさを確信しており、その点に関しては、たとえ「父」なるゲーテであっても、いや、「父」なるゲーテであるからこそ、ほんの少しの譲歩の気配も示さない。このことは、『視覚と色彩について』執筆後、同書に関してゲーテと交わしたやり取りによく表われている。

『視覚と色彩について』の原稿をアルトゥールは 1815 年 7 月ゲーテに送り、批評を請い、出版にあたってその刊行者になってくれないかと頼む。しかし、ゲーテはそれに対し八週間無しのつぶてを貫く。（生理的・物理的・化学的という総合的視座から色彩現象にアプローチするゲーテからするなら、自説に対するアルトゥールの個々の異論もさることながら、もっぱら生理学的な観点から色彩を論ずるその理論的基調に根本的な違和感を感じたに違いなく、アルトゥールの請願においそれとは乗れなかったのだろう。）9 月になってアルトゥールは再度ゲーテに催促する。そして、頼みを聞いてくれないのなら、原稿を返却してくれ、と請う[8]。

10 月になってやっと届いたゲーテの手紙では、Seebeck 博士に原稿を送ってみたいが、どうだろうか、博士とあなたとの共同研究が望ましい、と提案されていた。これに対し、ショーペンハウアーは 11 月 11 日十頁ほどの長文の手紙を書き、提案は、さる牧師の娘を連想させると応酬する。つまり、娘は自分が仕えていた主人に嫁入りすることを願っていたのだが、主人のほうは自分の配下の狩人を娘の相手にと考えていたのだ。あるいはジャンージャック・ルソー。かれはさる貴婦人に食事に招かれたのだが、それは婦人の召使たちとの食事であったとやがて気がついたのだ、と。Seebeck は剽窃するかもしれないとすら言って、ゲーテの提案を拒否する。自分が望

[8] 以下、ゲーテとショーペンハウアーのやり取りは Arthur Schopenhauer: *Der Briefwechsel mit Goethe und andere Dokumente zur Farbenlehre*, herausgegeben und mit einem Essay von Ludger Lütkehaus, Zürich, 1992 から引用する。

みまた必要とするのはゲーテのような「権威」なのだ。

> いかなる疑問も心に留め置かない勇気が哲学者たるものの勇気なのです。（･･･）この哲学的勇気はしかし、あなたがわたしに認めておられる探求への忠義・誠実と一体のものであって、反省行為から発現してくるものでもなければ、意図すれば何とかかき立てられるというものでもなく、生来の精神の方向性なのです。（･･･）わたしは、自分が色彩に関する最初の真なる理論を、科学の歴史が及ぶ限り最初の真なる理論を提示したことを、完全な確信をもって知っています。わたしにはまた、この理論がいつか一般に通用し学校の子どもたちにも広まっているだろうことがわかっています。（･･･）あなたの色彩論がピラミッドに喩えられるとしたら、わたしの理論はピラミッドの頂点、大きな建物全体が広がってゆく出発点となる分割不可能な数学的な点であって、この点なしにはピラミッドがもはやないほど重要なものなのです。いっぽう下方からいくらピラミッドを切りとっていっても、それはピラミッドであることを止めるわけではありません。

いかにも鼻っ柱の強い 20 代後半の青年の、思い上がった文面というべきだろうか。よりにもよってゲーテに向かってついには堪忍袋の尾を切らせ、あなたには私の理論の正しさがわからないはずがない、なにのに、いくつかの点であなたに反対しているから、その理論に取り組むのがいやで沈黙を決め込んでいるのだ、と傲慢な挑発の弁を吐くが、1816 年も 2 月に入るとあきらめ気分となる。

結局アルトゥールは、最後には一人で『視覚と色彩について』を刊行するしかなかった。刊本はむろんゲーテに送付されるが、その際アルトゥールは添え状（1816 年 5 月 4 日付）を同封し、同書はかなり訂正され増補されており、ご意見を伺いたく、また、この夏お会いできないかという趣旨の質問をかなり懐疑的な口調でお願いしている。添え状の始めは以下のような文章である。

> 閣下
>
> 印刷の完了した拙著を光栄にも、ご送付させていただきます。わたしはただひとりで酒ぶねを踏んだのです［『イザヤ書』63-3、ゲーテ『詩と真実』第三部第 15 章］。しかし、この点に関しても他の点に関してと同様、わたしは独力で立ってもいます。だからわたしの運命は次のようなものです。
>
> ナントナレバ、イカナル帝モコレホドノ余暇ヲワレラニ授ケルコトハカナワナカッタノダカラ。
>
> ジョルダーノ・ブルーノ

1600 年自らの信ずる真理のために時の教会によって火刑に処されたジョルダーノ・ブルーノからのこの引用（*De innumerabilibus, immenso et infigurabili*, 1591, VIII, epilog）は注目されてよい。これは 1819 年のベルリン大学宛の履歴書にも、主著第二版の献辞の草案にも見られたラテン文

である。それらはすべて、亡き父との関連で引き合いに出されていた。つまり、父のおかげ（その気質や遺産のおかげで）で、定職につく必要もなく、またまわりの状況に左右されずに（他人の思惑に配慮することなく）、哲学に専心できる「余暇」が確保されたのだ、と。ここでは、文脈上この「余暇」を作り出したのは、哲学者本人であることになっているが、しかし、以上のことを踏まえるならば、ここでの引用には「父」の面影が何ほどか「影響」していると考えることも許されよう。いや、もっと正確に述べよう。

ブルーノからの引用の初出はゲーテへのこの添え状である。したがって、1816 年段階では、ブルーノの文章と「父」とはまだ直接結びついてはいなかったかもしれない。しかし、この段階でショーペンハウアーは、ゲーテとの精神的訣別を決意する。その決意を告げたのが、ブルーノからの引用であった。どんなに偉大なゲーテの不興を買おうとも、「真理」に殉じたブルーノのごとく、自分もその確信を曲げることはできないと、ゲーテからの自立を宣言したのである。だが、アルトゥールは実の父、いまは亡きハインリヒ・フローリスからも、同じような精神的自立を獲得しようとしたわけではない。

確かに、ショーペンハウアーはゲーテに亡父の遺影をしのび、その庇護を求めつつ、なおかつゲーテを乗り越えて精神的独立を達成しようとしていたと、解釈することは――上にも見たように――可能である。しかし、その一方で、ブルーノの引用からも窺えるように、「父」とゲーテとの間にはやはり一線が画されてもいたのではないか。ゲーテからの自立を可能にし促したのは実は亡き父の面影であった。というか、ゲーテからの助力の断念がショーペンハウアーの自立を促す決定的一歩となり、それがやがて亡父の面影と結合し、自立の契機としてはひたすら父が強調され、父は「真理」と同一視されることとなった――むしろ、このように考えるべきではないだろうか。

ゲーテからの自立は、その色彩論に対する異論として具体化していたが、それはなにより「真理」を後ろ盾とし「真理」を自らの生と思想の準拠軸とすることによって正当化される。「真理」はその意味で絶対的「権威」であるとともに、「父」のイメージの具現にほかならない。なぜなら、「真理」への絶対的帰依（「真理」を絶対的「父」たらしめ、それに無条件に――死を賭してまで――服従すること）を可能ならしめた存在こそ、実在の亡父だったのだからである。亡父に対する思慕と敬意が、歳降るにつれていや増すように思われる素因はここにもある。具体的な生身の人間ゲーテからの「真理」の分離・独立がゲーテとの交渉（その共闘と確執）以降のこと、あるいは少なくともそれ以降により確実なものになったするなら、亡父と（亡夫の二歳年下の）ゲーテとの差異の確認を通して、アルトゥール・ショーペンハウアーは父の死を、侵すべからざる聖なる「真理」空間の確立・確定としてしてとらえなおすことに成功したと言ってもよいだろう。この「真理」空間は父がまさに死んでいるということによって難攻不落のものとなった（死者を攻撃することは誰にもできない）、ゲーテにすら攻略不能になったのである。「イカナル帝モ…」という引用句の反復はそのことを示唆しよう。

「真理」を自らの生と思想の絶対的準拠軸としたショーペンハウアーは、「真理」の認識に留まらず、「真理」の空間に棲息し「真理」の存在そのものと化さなければならない。つまり、「子」

であるみずからが「父」(「真理」) となるのでなければならない。それは、結局は子を持たなかった（実際には、持ちかけたが、生まれてまもなく失った）ショーペンハウアーにとって、自己自身を家族化することであり、作品という形で、失われた家族の代償を形成することであった。「子」と「父」は二人だけで家族として自己完結し自閉する。それゆえに、「真理」の実現を可能とした実在の父の心理的ステータスがひたすら高められるの反比例して、母と妹は彼にとって家族としての実質を失い（父の死の原因と思い定められた母との関係は 1814 年 5 月に決定的な破局を迎えていたし、妹とも良好な関係とは言い難い)、いわば家族の影と化してゆくことになる。

ただし、ゲーテとの関係はあくまで依存から自立への道をたどるのであって、端的な敵対関係に反転するわけではない。だからこそ、アルトゥールは主著公刊の折もそれを献本できた（ゲーテは熱心にそれを読んでいる、叙述の明晰さが特に気に入っているとの報告を、妹のアデーレから 1819 年 3 月に得ている）のであり、それ以前イタリア旅行に出る際にも、ゲーテに推薦状を頼むというある種虫のよいことをなしえたのである。また、1849 年 11 月 27 日の Sibylle Mertens-Schaaffhausen 宛書簡においては、フランクフルト市のゲーテ記念アルバムに事寄せて、『色彩論』に関してゲーテが蒙った不正に怒りつつ、次のように述べている。

> 彼［ゲーテ］は、25 歳のわたしを個人的にこの点に関する弟子にして、わたしを納得させるのに労力を惜しまなかったとき、デーモンに駆り立てられていたのです。彼は自分の受けた狼藉に復讐してくれる者を育てたのですから、いま天上から見下ろすなら、(･･･）［彼は］言うことでしょう、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と。

ここにおいては、故ゲーテは神格化されてもいるが、それは、イエスを神の子とする天の声を伝える聖書のもじり（『マタイ伝』3 の 17 参照）からもわかる。ということは、「わたし」は「真理」である父なる神（＝ゲーテ）の「息子」であることになり、自分はあくまでも、(この世における）真理の体現者としての地位を維持していることになろう。ただし、ゲーテは――そのままで――「わたし」の父であるという点にアクセントがあるのではなく、むしろ逆に、真理をつかんでいたがゆえに、そしてそれゆえにのみ、ゲーテは、真理の代弁者である「わたし」の父たる資格を得ることになるのだ（少なくとも、ゲーテと自分の父―息子関係は、唯一、真理によって結ばれているのであって、それ以外のなにものによってでもない)、というのがショーペンハウアーの「真意」というべきであろう。また引用において、父―息子関係を認定するのはあくまでゲーテのほうであるとされ、ショーペンハウアー自身ではないということも注目されるが、それも、一見謙遜のポーズにも見えるにせよ、むしろ、生前はショーペンハウアーの真理を正確に理解できなかったゲーテが天上に位置して初めてそのことを悟り、かくして彼を「息子」として認知することになる――ということは、そのときはじめてゲーテも「父」となったということだ――という筋書きだと理解すべき事柄であろう。

重要な点は、この時点では「父」ゲーテがすでに死亡し、非在となっているということである。彼の死は 1832 年 5 月 22 日である。1832 年とはこの世を悪魔の作品としたというエピソードを

伝えている断片の執筆の年であり、その翌年には例の「父への献辞」の草稿も記されていた。ショーペンハウアーにおいては、「真理」とは「父」の非在と一体化して屹立するものなのだ。

本稿の最終節ではこの非在としての「真理」に焦点を定めて議論が進められることになる。そして、これまで無造作に用いられてきた「真理」なる語がショーペンハウアーにおいて意味するその内実についても。

３．非在の「真理」

初版の分量の二倍以上に増補された『意志と表象としての世界』の第二版が 1844 年上梓された。第二版への序文も本稿第 1 節で見た草稿とは内容的にまったく異なり、量的にも（草稿が一、二頁のものだったのに対し）その十倍くらいに拡大された。少々抜粋する。

> 困窮と欲求にすべてが奉仕し苦役しなければならないということ、これこそまさに、困窮と欲求のこの世の呪いである。それゆえにこそ、光 Licht と真理とを求める、なんらかの高貴で崇高な努力が、誰からも邪魔されずに開花し、それ自身のための生存を許されるというような具合に、およそこの世はなっていないのだ。そうではなく、そのような努力はいったんは人々に認められるところとなり、よってそれのコンセプトが行き渡るようになったとしても、物質的な利害や個人的な目的によってたちまち取り押さえられてしまって、その道具や仮面に仕立て上げられてしまうだろう。（･･･）哲学はもう久しい間あまねく、一方では［国家という］公の目的のために、他方では［営利という］私的な目的のために、手段として奉仕せざるをえなかったのだが、わたしはと言えば、それには妨げられずに、三十年以上にわたって、自分の考えの道筋を追ってきた。そうせざるをえなかったからであるし、ほかにしようもなかったからだ。ある本能的な衝動のゆえにである。けれども、この衝動の支えとなっていたのは、隠された真実を考え照らし出したものはいつか、別の思考する精神を捉え、感銘を与え、喜ばせ、慰めとなるであろうという確信であった。（･･･）わたしの導きの星となっていたのはまったく本気で言うのだが ganz ernstlich、真理だったのである。（･･･）さて、わたしの哲学、すなわち、［人々の宗教的欲求におもねる思弁という］不可欠の小道具を欠き、遠慮会釈もなく、なんら滋養の足しにならず、沈思黙考する哲学――この哲学がおのれの北極星とするのはひたすら真理、裸の、報いられず人好きもせず、しばしば迫害される真理だけであって、右顧左眄せずに、この星を目指してまっすぐ舵を取るのである――は、あの alma mater［養いの母、母校］、滋養たっぷりの善良なる大学哲学と一体全体なんのかかわりがあるだろうか。大学哲学は百の思惑と千の下心を満載し、支配者の懸念、所管庁の意向、地域の教会の決まりごと、出版者の希望、学生の評判、同僚との友好関係、時局の動向、聴衆のその時々の嗜好、その他同様のことをたえず気にかけながら、わが道を慎重に面倒をかわしながら進んでいく。あるいは、個人的な目的をいつだって最内奥の動機としている、講壇や聴講席における喧しい学校の騒動と、静かで真剣なわたしの真理探究がいかなる共通性をもつだろうか。（･･･）このようにしてわれわれはほとんどいつの世もゴルギアスた

ちやヒッピアスたちが跋扈するのを眼にし、不条理がたいてい頂点を極めて、騙し騙される者たちの合唱をかき分けて個人の声が通ってゆくことなどありえないと思われるにしても――それでもやはり、本物の著作はいつでもそれ独自の静かでゆったりとした強力な作用を保ちつづけるのであって、最後には、奇蹟でも起こったかのように、本物の著作は喧騒の中から立ち昇ってゆくのが見えるのである。それはさながら、気球が、この地上空間の分厚い大気圏からより純粋な領域へと上昇してゆき、その領域にいちど到達すると静止して、もはや誰にもそこから引き摺り下ろすことがかなわなくなるようなものである。（SW I,S.15,S.17-18,S.25,S.26.）

以上の抜粋からも予想できるだろうが、1833 年の「献辞」草稿ではあれほどの熱情をもって引き合いに出された「父」はここでは一言たりとも言及されない[9]。この差はなにを意味するのだろうか。十数年の時の経過がアルトゥールの考えを変えたということではない。というのも、1841、42 年に記された「序文」草稿では「わたしの父」のことが、かつてほどの熱烈さは薄らいではいるものの、依然として言及されているからである（HN 4-Ⅱ,S.270）。もしかして、プライヴェートなことを公の場で露骨に口に出すのは憚られたのだろうか。「父」への謝意に溢れていた、すでに 25 年前の履歴書も、公的文書ではありながら、万人の目に触れるものではなかった。いずれにせよ、はっきりしていることは、公刊された主著の第二版への序文には、父は非在と化すということである[10]。

実は、1831 年に、アルトゥールは父母に関する視霊現象を体験したと報告している。この体験では、「自分が当時現存の母よりも長生きするであろうことが示唆され、すでに死亡していた父は光 Licht〔＝灯り〕を手にしていた」、という（HN,4-I,S.47.Vgl.G,S.251）（ちなみに母の死は 1838 年 4 月）。結局は「父」への言及が脱落あるいは隠蔽されることになった『意志と表象としての世界』第二版序文で「光と真理とを求める高貴で崇高な努力」が引き合いに出されていたのはわけなしとしない。父は「光」であり、「真理」である。あまねくすべてを照らし出す「光」、その意味で「真理」である「父」は、まさにそういうものであるからこそ、文章の表面からは身を引き、非在とならねばならなかった。

思えば、父は非在であることによって、哲学者としての息子にしかるべき「影響」を与えてきたのであった。まず、癇癪もちとしての父はその性格が不在となることによって、つまり、癇癪が鎮められているときにこそ、息子は同じ性格を共有しながら、哲学者としての活動をまっとうできるのであった。また、実在の父は、息子の側からするなら、まことに絶妙のタイミングで死んだ。学問かヨーロッパ周回の旅かの二者択一を迫られて息子が後者を選択したとき、いったん

---

9 草稿の文面は部分的に、『パレルガとパリポメナ』に収められた「人生知のためのアフォリズム」の中の一章「人が有するものについて」に利用されることになる（Vgl.SW IV,S.418-420）。ただし、そこにブルーノからの引用はもはや――公刊著作にはどこにも――見られない

10 ついでながら、初版への序文にも父への言及はない。CD-ROM や SW の索引で検索する限り、公刊著作のどこにも父の名は、総じて家族の名は出てこない。

は閉ざされたかに見えた学問への道を再度開いてくれたのが、結果的に父の死であり、息子に対する最終的な母の同意と激励であった。そして言うまでもなく、父の死という形の非存在は、息子に、遺産相続によって、生計の自立を可能にし、哲学者として「真理」に挺身する「余暇」を授けたのであった。（父の死は母ヨハナにも同様の、いやそれ以上の効能をもたらした。母がサロンを開いて、一躍教養女性の代表者として名を馳せるきっかけを、それは与えてくれた。息子には、それも許しがたいことの一つだったかも知れない。）

こうして三重の意味で父の非在は、息子に、哲学者としての道程を可能ならしめた。そればかりか、公刊された主著第二版序文からも、かつての計画とは異なり、父は非在となった。しかし、父が非在となることによって何が変ったのだろうか。それは、「真理」の前景化である。――非在の父によって、自分は哲学者としての本道を歩むことができた。しかし、哲学者の本道とは何か。それは、「抽象概念」を用いて世界の正体をありのままに描き出すこと、その意味で、「抽象概念による世界の完全な反復、いわば反射」（SW I,S.136）である。いや、「反射」に尽きない。むしろ、その反射を通して、人間の生き方の道筋を指し示すことである。世界の反射と人生の指針とが渾然一体となったものこそ、ショーペンハウアーにとって「真理」の名に値するものであり、それが、主著『意志と表象としての世界』を始めとする多くの著作で彼が解き明かそうとしたことであった。その限り、「真理」とは世界の実相であり人生の規範であった。この意味での「真理」が第二版序文で前面に掲げられ、それに献身する自分の姿が顕彰される。

そのためには、哲学者たる自分は、「真理」を歪め裏切るこの世の猥雑な欲望に左右されない存在として描き出されねばならない。猥雑にして卑小な欲望から脱却し逆にこの世を観照する生活上の「余暇」を授けたのが父であった。だが、いかに父の恩が尊いものであろうと、そしてそれに応えようとする息子の志がいかに気高いものであろうと、それは所詮この世の卑賤な凡事の一例にすぎない。それはあくまで、アルトゥール・ショーペンハウアーという個人の私的事情であって、「真理」をひたすら求めるべき哲学にとってはたんなる偶然にすぎない。父への熱き思いは私人の胸にしまわれて、哲学の公共性に顔を出すべきでない――公刊著作からの父の非在の理由とはこのようなものだろう。

ところが、世界の実相にして人生の規範としての「真理」それ自体も、『意志と表象しての世界』――総じて公刊著作の――本文においては非在となる。ちょうど序文で「父」が非在であることによって、「真理」に殉ずることを怖れない哲学者としての「息子」の存立を可能ならしめたように、この「真理」概念はショーペンハウアー哲学それ自体が成立する一大前提をなすものとして、（序文後の）本論における思想の行論からは身を潜めることになる。本論で公言される真理概念はもっぱら「世界の反復」としてのそれである。まるで、非在の移譲ないし転移が生じたかのようなのだ。どうしてそういうことになるのであろうか。

ショーペンハウアーにとって「真理」の具体的内容とは、物自体としての「意志」でありその「意志」に弄ばれては苛まれるこの世の悲惨である。意志とその悲惨とは、この世の人々が生きている「真理」である。上掲第二版序文などに活写された「哲学教授」連が繰り広げている醜悪な姿とは、その戯画にすぎない。

生きられている「真理」は認識されている「真理」ではない。哲学とは言ってみれば、生きられている真理を認識される真理へ転換し昇華する営為にほかならない。しかしそのためには、認識へと転換・昇華されるべき対象に対し、何らかの距離を取る必要がある。ところが今の場合、真理は生きられてしまっており、したがってそのうちに人は――認識者自身も――巻き込まれ埋没している。そこから距離を取ることは至難の業である。とすれば、距離はことさらに創出されねばならない。そしてその創出は認識そのものによってなされるしかない。生きられる「真理」の認識とは、その認識自身の前提条件の創出と同時的になされねばならないのである。

ところが、意志的要素が認識に混在する限り、意志という「真理」の認識は不可能である。なぜなら、意志はつねに人間をして「真理」を、つまり意志自身を生きさせてしまうのであって、それに対して距離をたもった認識の対象化を遮断してしまうからである。「意志それ自身は認識以外のなにものによっても廃棄されない」(SW I,S.544)。それは裏を返すなら、「認識」は意志を脱却したところでしか成立しないということである。そしてそのことは、哲学に人生をささげようと決意して間もない、23 歳の若きアルトゥールが、息子の将来を慮った母の働きかけもあって、哲学の専攻に再考を求めた老詩人ヴィーラントに対し、「生とは厭わしい事柄です。僕は、この生を熟考することによって生を過ごして行くことに決めたのです」[11] と答えたときに、すでに示唆されていたことでもあった。

後年ニーチェがいかなる犠牲もおそれぬ「誠実性」を体現した人物としてショーペンハウアーの名をあげ､そのことによって「良きヨーロッパ人」の代表者（『愉快な学』357）と称したのも、若い頃のショーペンハウアーの国際的な経歴もさることながら、「意志」に発する人生の利害をことごとくものともしないところで屹立する「真理」の認識に彼の哲学の真骨頂を認めたればこそであった。

こうして意志の穢れをきれいさっぱり拭い去ったところで、そしてそこにおいてのみ、「真理」の認識という偉業は達成される。それはつまり、「真理」認識の圏域とは、まさに意志という認識さるべき真理内容からの超出領域として存立するということである。しかし、世界の実相とは「意志」であり、意志の「表象」である。したがって、「意志」からの超出とは世界それ自体からの超出であって、しかも世界以外に存在はないのだから、その超出領域とは無、非存在であるほかない。「真理」の認識は無、非存在の場でなされるのであり、また同時にその無の場を創出する作業にほかならない。だが、この無とは、「意志」の世界の側に身を置いた立場からの規定にすぎない。無の場に視座を定めるならば、世界、この現実の世界こそが無とみなされねばならない。だから、『意志と表象としての世界』正編第四巻の最後はこう結ばれるのである。

> 意志の全面的な廃棄の後に残るものは、いまだ意志に満ちた者すべてにとってはたしかに無である。しかしまた反対に、意志が方向転換し自己否定をなした者にとっては、このわれわれのたいそうリアルな世界が、その恒星の数々と銀河の数々とともに――無なので

[11] Gwinner, W.: *Arthur Schopenhauer aus persönlichem Umgang dargestellt*, Frankfurt a.M., 1987, S.45.

ある。(SW I,S.558)

「認識」は世界を無化してそこからの超越を可能にし、この超越的無の立場から、「意志と表象としての世界」の真相が描写される。だが、この「認識」の立場は「意志と表象としての世界」の思想内容全体の前提でありながら、なおかつそれ自身を自己創出しなければならない立場であった。その限り、「意志それ自身は認識以外のなにものによっても廃棄されない」という、この「認識」の立場を直示するような（上掲の）文章などが著作の行論の途中で唐突に顔を覗かせ、認識とはことごとく「意志」に奉仕するその手段であるという、それまでの一般原則と真っ向から矛盾するような事態を招いて、読者を混乱に陥れることはあっても、自己創出される前提という、きわどいこの「認識」の立場そのものは、ショーペンハウアーにとって正面切って論じることが極めて困難となってしまったのである。

「真理」とは世界の実相と人生の規範が渾然一体となったものであった。たしかに、こうした「真理」概念は伝統的になんら目新しいものではないかもしれない。要するに、本節最初の引用からも察せられるように、「真理」のためには命を失うことも厭わない（しかし時が立てばいずれ世の中もわかるだろう）という場合の「真理」がそれにあたる。しかし、近代以降、とくにヒューム以降、「事実」と「規範」の峻別が哲学的には「常識」となるにしたがって、「事実」＝「規範」としてのこの「真理」概念は旗色が悪くなってきた。実際、ショーペンハウアー自身が真理概念を論じ、それを四種類に分類するときにも（『充足根拠律の四重の根について』における「論理的真理」「経験的真理」「形而上学的真理」（これは初版時の命名であり、1847 年上梓の再版においては「超越論的真理」と改名）「メタ論理的真理」の四種類）、そのいずれにも「規範」としての「真理」の意味合いは認められない。

この「真理」概念は西洋の伝統においては、「神は真理である」とか「真理は神である」とか、あるいはその両者が合体したものとして理解されてきたものであろう。だが、ショーペンハウアーにおいて特徴的なことは、「真理は神である」とはまだしも言うことができても、「神が真理である」のほうはもはや妥当しないことである。言うまでもない、ショーペンハウアーはドイツ人「最初の公然たる不屈の無神論者」（ニーチェ前掲書）だからである。したがって、「真理は神である」も正確には、「真理は神の代理人である、ないし神の相当物である」の意味でなければならない。ショーペンハウアーは「神は真理である」を「真理は神である」に転換したといってもよい。「真理」はいまや神という究極の支柱ないし保証人を失ってしまった。だが、それだけに、「真理」を神的地位に据えるには、並々ならぬ精神の腕力が必要だった。ショーペンハウアーは「真理」を神格化することによって、逆に神から解放したのである。だから彼は、「わたしの導きの星となっていたのはまったく本気で言うのだが、真理だった」と大言しえたのであり、絶対的規範としての「真理」に導かれている以上、自分の哲学の真理は最終的に勝利を収めずにはおかないと確信していたのだ。（もっともニーチェなら、そこになおキリスト教的伝統の残滓を見たであろうが。）

（主著第二版序文の最後にある）「気球」に乗ったショーペンハウアーは天高く舞い上がり、地上からはもはや誰にもその姿は見えない。この高みにあって非在となった「真理」がしかし、

地上のあらゆる真理を見渡し、いわば一望監視するのだ（高所からの展望に対するアルトゥールの嗜好はあのヨーロッパ周回時に、両親に促されて付けていた「旅日記」にもすでに明らかであるが、本稿 35 頁の『視覚と色彩について』初版からの引用などを参照）。そして、非在の「真理」のこの高みとは天なる「父」の玉座であることは言うまでもない。

ショーペンハウアーは、西洋の歴史上はじめて、少なくともそのきわめて早い時期に、「真理」がいかなる宗教的基盤も抜きで、それ自体として、絶対的規範となったことを揚言した。「無制約的な誠実な無神論」（ニーチェ前掲書）――ショーペンハウアーのこの立場においてはじめて、（単なる事実そのままというに留まらない）自立的な絶対的規範としての「真理」はその姿を剥き出しにしたのだ。この規範としての「真理」概念に則って、ショーペンハウアーは自らの哲学的営為を繰り広げていたのであって、その心意気は上掲の第二版序文にも遺憾なく発揮されていよう。何かが「真理」だとすれば、それは「真理」だからこそ、そして「真理」であるというそのことだけによって、いかに醜悪で自己にとって、いや総じて人間に不都合な内容であれ、万難を排して追求されねばならないのだし、またそれに値するのだということである。

そして、この絶対的規範としての「真理」概念が、現代においても依然として、その学問的活動の規範として作動していることは、縷言するまでもないだろう。

（すとうのりひで　現代思想文化学・教授）

Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit.
― Arthur Schopenhauer und sein Vater

Norihide SUTO

In diesem Aufsatz versuche ich, das Bild des Vaters als Bürgen der Wahrheit bei Arthur Schopenhauer (1788-1860) herauszustellen, wobei die Bedeutung der Wahrheit selbst als ganz unabhängig von allen religiösen Gründen neu bestimmt wird. Arthurs Vater, Heinrich Floris Schopenhauer (1747-1805) starb, als Arthur 17 Jahre alt war. Er hinterließ ein großes Vermögen, wodurch sein Sohn lebenslang ohne eine Stellung zu finden seinen Lebenunterhalt verdienen konnte. Der Vater aber, der ihm die Selbständigkeit des Lebens sicherte, hatte gewünschte, daß der Sohn, der ein Wissenschaftler zu werden hoffte, als sein Nachfolger sich zu einem Kaufmann ausbilden lassen würde. Durch den plötzlichen, frühen Tod des Vaters wurde der Weg zur Wissenschaft dem Sohn eröffnet. Trotzdem, nein! gerade deswegen wurde der seitdem abwesende Vater als ein abwesender vom Sohn mit der „Wahrheit“ identifiziert. Vielleicht regte sich in seiner Seele das unbewußte Schuldgefühl in Hinsicht auf den Tod des Vaters. Der abwesende Vater wurde für ihn zum Symbol der selbst abwesenden „Wahrheit“, weil diese „Wahrheit“ sozusagen eine transzendentale ist, indem sie als reine, von allen andren Absichten befreite Idee die wissenschaftliche Erkenntnis der einzelnen Wahrheiten ermöglicht. Dieser Begriff der (transzendentalen) „Wahrheit“ als „Vater“ ersetzt die Rolle „Gottes“, macht gerade dadurch sich besonders von religiösem Hintersinn los, und scheint heute noch ein leitender Stern der Untersuchungen in allen Wissenschaften zu sein.

「キーワード」
亡父、無意識的罪責感、旅行、ゲーテ、真理